

珠玉の日本画 御舟と一村

岡田美術館（箱根・小涌谷） 24. 12. 15～25. 06. 01

「速水御舟」（1894～1935）は、明治末期から昭和初期まで東京で活躍して近代日本画に大きな足跡を残した巨匠で、その優れた作品と清廉で求道的な制作態度に、当時の画家たちが尊崇の念を寄せ、14歳下の「田中一村」（1908～1977）もまた「御舟」を尊敬した一人であった。

本展では、二人の代表作御舟《木蓮（春園麗花）》と一村《白花と翡翠》を中心に「11作品」を公開し、併せて「富岡鉄斎」「横山大観」「東山魁夷」「加山又造」らの作品も紹介して、明治、大正、昭和の日本画の変遷を展観する。



速水御舟《木蓮（もくれん） 図巻》 1926（大正15）年 左図・中図

画伯の墨画は、細密描写を離れてゆく時期に現れてくるが、これは古典絵画において数々の象徴的表現が水墨でなされたことと決して無関係ではない。

本作は、漆黒という言葉が思い浮かぶような、濃墨による木蓮の花が印象的で、輪郭をぼかさずくっきりと形を表しているので一見写生的であると思われるが、花は図案を思わせるほどに形が整理され、丁寧に仕上げられている。

田中一村《白花と赤翡翠（アカショウビン）》1967年 絹本着色 右図

リズム感あふれる装飾性豊かな画面は、まさに南の琳派にふさわしい作品で、白い花「ダチュラ」と緑の葉のコントラストに、アクセントのように描かれ「アカショウビン」は、正確にスケッチされた透明感が満ちている。

葉背後の薄黒な色相の中に、丹念に「ガジュマル」の気根が描き込まれ、白花の「ダチュラ」を浮き立たせ“白と緑青の流れるような美しさ”がある。